

### 3. 「インドシナ難民定住受け入れの現場から」

寺本信生（元難民事業本部・元定住支援センター施設長）

寺本 寺本と申します。私は 1950 年生まれです。1950 年というのは昭和 25 年なのですが。日本で言うと。たぶん、その年で一番話題になるのは、ベトナムではなくて朝鮮戦争が始まった年だという記憶が、日本の人には多いのではないかと思いますけれども。その前の年、1949 年に中国大陸で国が成立し、それから台湾と中国に二つに分かれた。それからヨーロッパのほうではドイツが二つに分かれた。ベトナムはもうちょっと前からなのですからけれども、南北に分かれている。それから、朝鮮も南北に分かれたという大きなホットウオーがいつ起きるか分からない。実際に朝鮮でホットウオーが起きたわけですからけれども。そういう年に私は生まれました。それから、今、68 年です。

同じ年にヨーロッパでは相当数の難民が出ております。難民条約というのが、その年に国連で成立をして、実際の発行は翌年の 1951 年の当初からということになります。ですから、なんだか知らないのですが、私の歴史が戦後の難民の動きそのものに乗っかっているような気がしております。

柳瀬さんがお話しされたように NGO として日本国内、難民キャンプ、アフリカといろいろな多彩な活動をされて、皆さんのマスコミも取り上げられるし、NGO だけではなくて一般の市民からも期待されるような活動をされていらっしゃるのを見ると、私の属しておりました RHQ（難民支援事業本部）は基本的に日本政府から金をいただいて、日本政府が「やれ」という仕事をコツコツとこなすという、じつにつまらない仕事をやってきたのかなという気がいたします。

私自身は先ほど吹浦さんがおっしゃっていましたが、ベトナム戦争世代の最後です。学生時代にベトナム戦争があって、1 回、実際にやっている戦争というものを見ておかないとなにも分からないだろうなという気がして、青年海外協力隊に入っ、学生時代だったのですけれども、ラオスに行きました。

1974年～1976年にかけてラオスのビエンチャンの水道局で水の分析をするような仕事を2年間やっておりました。

1975年4月末から5月にかけて、まずカンボジアのプノンペンが陥落し、それからサイゴンが落ちました。その後ラオスの場合、ビエンチャンは戦争状態にはほとんどなかったのですけれども、北からクメールルージュではなくて、パテトラオという俗称の共産系の軍隊がやって来て、自由主義系の政府は崩壊していきました。そこで「やばい」と思った人間はメコン川を渡ってタイのほうにどんどん逃げていく。国がどうか、政府がそういうことで自然消滅して崩壊していくような中で、共産党が政権を握って、その年の12月くらいに国としての成立を見たわけですけれども。メコン川を渡った向こう側にはラオス人がたくさん難民として逃げ出すというような状況を現地で見ておりました。

私なども、「いつどういう状況になるか分からないから、常にパスポートは持ち歩け」と。「いざとなったらすぐにタイに逃げろ」という指示を聞かされながら、仕事はそのまま継続してできたものですから任期いっぱいいましたけれども、現地で国の崩壊と難民が流出するものを経験してきました。

それで1979年、カンボジアで大きな変化があり、難民が大量にカンボジアからタイに移動するということが起こりました。もちろん、ベトナムからボートピープルという人たちが、先ほどお話がありましたように1975年の5月。国が変わってすぐに日本に到着しています。ただ最初の頃は法務省も水難救助という形のビザを出して、日本にとりあえず人道上の上陸は認めるけれども、日本にずっといることは認めないよ、と。どこか行けるところに行きなさいという、そういう扱いをかなりやっておりました。

当初はアメリカが割と引き取る。先ほどのお話にもありましたように、共産国から逃げてきた人たちに対して、アメリカはかなりビザの発給が容易だったということがあって行ったのですけれども、政策がだんだん厳しくなってきた、日本に到着したベトナム人も簡単にアメリカやフランスに行けなくなるという状況があって、日本に滞留し始めたのです。

その滞留していた人たちの受け皿として、割と早くから支援していたのは、カトリック系のカリタスという団体です。全国にある教会とか修道院とか、そういうところに何十人ずつを住ませるといったような形でボートピープルの人が、北は北海道から沖縄まで分散して、いろいろな教会などに住んでいるケースが多かったです。

それから、ほかの宗教団体も天理教だとか立正佼成会とかいうところも援助をしておりました。あと大きいのは日本赤十字です。日本赤十字も自分の手持ちの施設というよりは昔の結核療養所の跡だとか、戦災で海外から引き揚げてきた人たちの施設の空いているところとか。そういうかなりくたびれたような施設に、とりあえずベトナムの人たちに住んでもらう。最終的にはアメリカに行ってもらうのだ、というような政策が 1970 年代、かなり行われておりました。

1979 年に東京サミットがあり、そこで日本もやはり定住という形で受け入れなければいけないという政策の変更が出てきています。もちろんその前後に留学生で来ていた人たちの定住を与えましょうとか、細かいことではあったのですが、一番大きな政策としてはやはり 1979 年の東京サミット。そこから大きな流れが変わってきます。

日本でも定住という形で日本に受け入れることを国の政策としたわけです。直接、国が事業としてやるという形をとらないで、アジア福祉教育財団の中に難民事業本部をつくって。そこに対しては国が 100%、金を出すから、実際に個々の定住受け入れの措置はそこがやれということで委託をされた形です。

主な資金は、外務省が施設の運営など全般を見る。日本語教育に関しては、今は文化庁ですが、昔は文部省から。それから就職にあたっての支援関係の金は労働省が金を負担しましょう、と。主に 3 省からです。

それから、大村に施設ができ、それは少し性質が違うものですから、そこは入管の関係で法務省からの金が出てくる。定住者以外にも定住許可を受けていないようなケースもあり、日本の UNHCR からの資金もいただくというような形で、定住センターを運営しました。

姫路の郊外のマリア病院というカトリック系の病院の敷地の中にポートピープルのための施設があったのですが、1979 年 11 月に、その隣に同じようなプレハブで、私どもの資金で平屋建てのプレハブを 10 棟くらいつくって。居住棟と食堂と、それから日本語教育のための教室をつくりました。

最初の計画は、入ってきた勉強する入所者ですね。その人たちに「自分で食事をつくりなさい」と、自炊をさせたのです。ところが、自炊させると、夜は良いのですが、朝昼自炊をしていると授業に出てこないわけです。食べ終わらないわけです。1 時間くらいの休憩の間に食事をつくって午後の勉強をするということが。真っ当な教育が全然うまくいかないというので、やはり自炊は無理だということで、最初

はお弁当をとる。日本の業者からお弁当をとって、みんなに配ってなんとか食べてもらう。ただ、日本の弁当だから人気がない。あまり食べないわけです。

それで、急遽、厨房をつくって、コックさんがちゃんと料理をつくって食事を出すことに、出来て2カ月くらいで変わりました。神奈川県の大和というところに、ここもやはりカトリックが持っている敷地を利用してつくったところなのですけれども、大和定住センターをつくりました。その開所がなんと2月29日。設立日が4年に1回しか来ないという。なにがなんでも2月中につくれという命令というか、そんなことがあって開所させました。開所する直前に姫路から「厨房をつくって食堂をつくらないと回転しないよ」という話が伝わってきて、計画を急遽変えて、食堂と厨房をつくろうと。日本人の業者に「こういう人間だから、それなりの料理をつくってほしい」という委託をして、なんとか授業にみんなが出られるようなシステムにしましょうという切り替えを、本当にぎりぎりの29日の朝までかかって、ようやく終わった、ということがありました。

最初の委託は、受け入れをして、健康のチェックをして、生活をさせながら日本語の勉強をする。終わったら、就職の斡旋をしてセンターから送り出す。送り出したら、空いた場所にすぐ次のキャンプからの入所者を入れるということで、年に8回くらい回転をさせるのだということをやりました。

出てしまうと、あとは日本のシステムの中で暮らせばいい。だから、アフターケアというものは、私どもはやる必要がない。それは日本の既存のいろいろな制度の上へのっかっていけばいいのだから、そこでやってもらいなさいという話で、予算もついていないし、仕事がやれる人間もついていないという状況で始まりました。

ところが最初のうち、日本語は3カ月しか勉強していませんでしたから、片言の日本語ができるかどうか。まして読み書きというレベルには達していない状況。それが社会に出て、日本人と同じような仕事をして、子供を学校に通わせて暮らささいと言って送り出すわけですが、できるはずがないわけです。

相談というのは、それこそ事業主からも相談が来るし、学校からも相談が来るし、本人たちからも「どうしていいかわからない」と相談が来る。それが常時来るわけですが、それをやるスキームを私どもが与えられていない。それでも言葉が通じる人間は私どものところしかいないわけですから、それをなんとかしなければいけないということで、いわば隠れて5時以降、勤務が終わったところでみんなのところに相談に行って「手伝ってあげるよ」というようなレベルの仕事から始まりました。

どこだったかな。1992年7月に行政勧告が出ました。それは、センターの運営がある意味であまりにひどい、うまくいっていないということがあって、行政監察が入って、定住センターの仕事について見直しや問題点をかなり丁寧に拾ってくれました。

私も面接を受けて、いろいろな仕事の内容について話をしたことがあります。その行政監察で、もっと日本語の教育を充実させておかなければいけないとか、アフターケアの部分も重要であるとかいうようなことが勧告として出て。その後、ようやくそういう形のものについての金が、予算がつき始める。なんとか本当の意味で定住ということがやれるようになっていったという大きな起点にはなりました。

1989年には偽装難民騒ぎがありました。ベトナム人だというのが直接日本に、3,000人近く押しかけるということが起こりました。その人たちについて、かなりの部分は私どもの施設の中で受け入れをしたのですけれども、途中から、「ベトナム語ができない」「なにかおかしい」ということで、入管サイドも調べて。結局、中国の南部のほうから日本に出稼ぎに来る人たちが、「ベトナム難民と称すれば日本で受け入れてくれる」という噂が伝わって大量に日本にやってきたのだということが分かりました。そのほとんどの人は中国に翌年くらい、1年半くらいかけて送還をされたということがありました。

なかなか善意の善良な人たちだけというわけにはいかない。ある意味、甘くするといろいろな人たちも入りかねないということを経験しつつ、この事業を進めてきたということがあります。

今はインドシナの人たち、データにあるように、それなりに安定した生活を始めております。定住から永住に変わり、それから帰化に変わって、日本人と変わらないような生活をする。婚姻関係も日本の方と婚姻をするケースも相当にあります。必ずしも具体的な数字としては掴めてないのですけれども、話などを聞くと、あまりハンディなくというか、日本人の方との婚姻がずいぶん進んでいるなという気がしております。

今のRHQは日本に難民申請をしている人たちへの支援と、それから、ミャンマーから第三国定住という形で入ってくる人たちの仕事をするということが続けております。以上です。

人見 寺本さん、ありがとうございました。難民事業本部、インドシナの方々が最初に日本に来たときに、いろいろなサポートを受けるところでの取り組み、とくに古い時代の厨房をつくった話は初めて伺いました。いろいろな試行錯誤をされたことお聞きできました。では、第2部の最後になりますけれども、比較的こちらは新しい活動ということで、難民支援協会の代表理事の石川さんにお話しをしていただきます。